付録資料

資料1 「トンファの樹林の中で」の翻訳

1981年11月29日～12月9日記。「トンファの樹林の中で」については、1986年12月に清書が再掲されている。

11月29日～
12月9日

トンファの樹林の中で　1-13

キム・ミョンファ

抗日パルチザン闘争時期を考えるたびに胸の熱くなる話が数限りなく回想される。

その中でも私の目の前に鮮やかに浮かぶ話が一つある。それは1938年の早春にあったことである。

イッカル，チャンナム（共に針葉高木）が密生したトンファの深い樹林の[redacted]はまだ雪が溶けていなかった。風が吹くとうっそうとしたこの樹林は《イーン，イーン》という音をたててひび声をあげた。すると樹林の中は吹雪にくるまれてもうもうとなった。

ある日私が属した連隊はちょうどこのトンファの樹林の中を行軍している途中で休息した。隊員たちはおよそ一ヶ月を越える強行軍ですっかり疲れていた。

糧食はなくなってからすでに久しかった。しかし我々パルチザンはそのひどい苦難の道を抜けながら敵を探して険山の樹林の中を過ぎてきた。

我々は落ち葉たきをあちこちにたいてそのまわりに集まって座[redacted]って休息していた。連隊長はたき火が燃える近所の倒木に腰かけて私に話していた。その時私は裁縫隊員だった。

連隊長の声は深く太く[redacted]震えていた。《…ピ同志の病勢が危急になりました。日が経つほど悪くなる[redacted]（ばかり）です。我々のように健康な体もぐったりとなる状態なのに。足に重傷まで負ったのだからどうして苦痛を感じないことがありますか。ところがその同志は歯を食いしばって苦痛をこらえ抜いています。それを[redacted]（どうして）目を開いて見ることができますか。…》

連隊長は口ひげをぶるぶると震わせると私の手首をぎゅっと握って[redacted]（話）を続けた。

《ピ同志は安静させなければなりません。敵をこの樹林の中で安静させましょう。私はミョンファ同志がそうしてくれると信じます。》私は胸が重苦しかった。どのように答えなければならないのか分からなかった。獣の足跡さえまれな，音の話に出てくるようなそんな隅も当たらない樹林の中だった。そんな樹林の中で戦友たちと離れていなければならない[redacted]（こと）を考えると，とてもつらかった。それに加えていつ帰って来るか分からない連隊

を心うつろに待ちながら素手で患者を救援しなければならないことを考えると、さらに重い責任感を感じた。たき火はぱっぱっと音をたてながら続けて燃え上がった。連隊長は私の手を固くつかんだまま黙々と座っていた。私は考えにふけった。

この厳粛な瞬間に私の頭には昔の追憶の一つが浮かんだ。…1932年陰暦8月4日私が避難根拠地に入る直前にあったことだった。

その日の夜《討伐隊》の奴らがポンリムドン（ヨンゲン県）に攻めこんできて私たちの下の家に火を放った。

私は後ろの山で燃える家を見下ろしながら、

《革命の同志たちよ！私は女の身であっても同志たちの魂を継いで最後まで戦います。》と誓った。

その日の夜私の夫も奴らに逮捕され、その後獄死した。夫の父はその日の夜燃える家の庭で《革命万才！》を叫びながら虐殺された。…

私は頭を上げて連隊長に決心を話した。《革命に助けになることならば水火をいといません。私にご同志を任せて下さい。》

こうして険峻なトンファの樹林の中に私はご同志と共に残るようになった。戦友たちは残る人間のために草ぶき小屋を作ってくれ、各自小麦粉の中着をはたき、二た枠になるかならないかのとうもろこし粉を残してくれた。そして頼が平べったい（その時はやせ細っていたが。）ある戦友はポンナムの皮の中に大事にしまっておいた石マッチ（何でこすっても火がつく）二つを私の腰巾着の中に入れてくれた。連隊長は最後に私に言った。《十日後には我々は帰って来ます。十日の間だけ辛抱して下さい。…》

連隊は出発した。連隊が出発した後私はこれからのことを心配して考えにふけった。十日の間と言ってもどんな難関に出くわすかも知れない。連隊がその日に帰って来れないかも知れないということを予見しなければならなかった。どうしても信に見て二十日は辛抱しなければならないだろうと私は考えた。そうだとすれば二十日間の糧食問題をどのように解決しなければならないか——

私は中着をはたいて戦友たちが残してくれたとうもろこし粉をさじで数えてみた。54さじだった。54さじならば一日三度の食事に三さじずつで十日すれば30さじ、20日ならば60さじなければならなかった。20日としては6さじ不足した。私は考え抜いた末に足らない量をさじ[redacted]いっぱいにならないように粉を取り出す方法で解決しなければならないと決心した。私が食べる食糧については心配しなかった。私[redacted]自身は何を食べてでも生きることができそうだった。ピ同志さえ生きることができるならば私は食べなくても生きられるようなそんな心情だった。

[redacted]よ赤火は[redacted]戦友たちが燃やしていたたき火を消さな[redacted]いように[redacted]れば[redacted]た。だが患者に必ず必要な薬がなかった。あるのは患者に対する看護者の真心だけだった。私はこの真心という薬だけは充分に与えてやろうと決心した。

苦難の日々が流れ始めた。私は朝早くから背のうを肩にかついで小屋を出た。私はまず山の尾根づたいに歩いて頂上に登って行って《討伐隊》の奴らが這い登って来ないかと山の下の方を詳細に探ってみることを一日の最初の日課とした。その後にあの山この山を登り下りしながら雪の中に埋まったふるびた松[redacted]を拾い集め、年を越した木の葉、草の葉を拾い集めて背のうを充たした。

初春だったので食べられるやわらかい青い草[redacted]あるはずは全くなく、年を越してひわきはてた山ぶどうの葉、チャムチ、ソンゴッ、ムスヘ、にんじんの葉は雪の中に埋まっていて、拾い集めるのは非常に困難だった。

このように苦労して得た松[redacted]は[redacted]まま火で焼いては中の焼けた松の実を取り出し、油ののった黄色い実を再び火にあぶった。それを粉にして一食に二さじの松の実の粉と一さじに充たないとうもろこしの粉[redacted]を混ぜて水に溶かしたものが患者の一回の食事だった。

私は乾いた草の葉を水につけて[redacted]、その中に松の実の粉を少しずつ入れて沸かして飲んだりした。

食べる物を求めるために朝早く小屋を出ては陽がちょうど沈みかける時にやっと帰ってきたものだった。山の中なので午後4〜5時頃になればすでに隅々が暗くなった。小屋に帰って来る時にはくぬぎ、まゆみなどの乾いて固くなった木の枝を頭にのせて帰ってきた。

日は過ぎていった。日が経つほど難関はふえていった。地面に落ちたふるびた松かさはもうなかった。松の高い若枝にぶらさがった松かさを長い竹竿ではらい落とさなければならなかったが、食べる物も食べれずに力が尽きた体でそれをやろうとすると文字通り《決死戦》と異ならなかった。

そして年を越した葉も人が通れるぐらいの平たく広がった所にはもうなく、歩みを移しにくい崖になった所にだけあった。

またある日には行ってみたことのない遠くの山を歩き回っているうちに暗くなって山の中で一晩中さまよったことも一、二度ではなかった。こんな事状があった時にはピ同志はきまってのどがしわがれてしまった。彼は小屋の入口をいっぱいに開けて一晩中《ミョンファお母さん!》と私を呼びながら一睡もせずに夜を明かした。

待ち焦がれた十日が過ぎ、二十日も流れていった。

一月が過ぎたある日だった。

松の実の粉に水を混ぜて急者に差し出した私はぶるぶる震える足をやっと動かしながら小屋の入口を出た。ピ同志は背のうをかついで小屋の入口を出る私に言った。

《遠くに行かないで下さい。私はもう食べなくても生きることができます。ミョンファお母さんさえそばにいれば生きることができますからどうか遠くに行かないで下さい。---》

私はあわれむような目で戦友をふり返りながら言い聞かせた。

《遠くへ行かないと言うのに。私が帰って来るまで良い夢でも見ていなさい。》

私は山の斜面を登り始めた。足を思うように動かすことができなかった。力が尽きたうえに靴まで破けて足印(足袋をはく時に足につける印)で足を

まいて歩いた。私はピ同志の靴まで破いてしまった。

しばらく後に私は腹這いになって山腹の隆起を登っていた。やっと山の中腹にまで登った私はそれ以上這い登る力がなかった。私は坂になった地面にうつ伏せたまま周囲を見回した。約10メートル位さらに這い登れば そこに松の木が二本立っていた。私はありったけの力を出してそこまで這い登った。

松の木にもたれて体を起こした私は木の上を見上げた。松かさはいくらもぶらさがっていなかった。それでも二本の木にぶらさがったのをとれば一日の食事は間に合うぐらいだった。

私は傾斜した山腹の隆起した所を選んで立って竹竿をふり上げた。一番下の枝にぶら下がった松かさ二つはいくらも骨を折らずに落ちた。ところがその上の枝には竹竿が届かなかった。やむをえず私は足布をほどいて木に登り始めた。人の背ほども這い登ると手足がぶるぶる震えた。そして目の前に火花が起こった。私は目まいがする力のをこらえて木にかじりついて抱きついてしばらく耐えしのんだ。そして歯を食いしばって腰ひもの内側にさした竹竿を片手で引き抜いて松かさをひっぱたいた。片手でひっぱたくので力が弱く、松かさは何度たたかれてもなかなか落ちなかった。私の全身は汗まみれになった。とうとう一つが落ちた。その刹那に私は目の前がくらくらっとなった。力ががくっと抜けた私は崖のように険しい山の下にころがり落ちた。---あらゆる鳥の鳴き声に 私は気を取り戻した。かすかに目を開けるとイッカルの木のすがすがしい葉の間から青い空が見えた。その青い空は手のひらほどだったが、私にはそれがどんなに広く見えたか知れない。鷹が一羽その青い空をゆうゆうとぐるぐる回っていた。それをながめる私はこんなことを考えた。

（ピ同志と一緒に 私もあの鷹のように青い空を自由に飛び回ることができないのだろうか。 あの鷹は恋しく見たい私の連隊を思うままに見下ろすことができるのだろう。）

こんなふうに考えると私の胸はいっぱいになった。この上なくやるせない心情だった。私は鷹に静かにささやいた。

《鷹よ！うらやましい鷹よ！お前は私の言葉を連隊に伝えておくれ。私たちは死なずに生きていると。連隊が帰って来るまでは決して死なないと。鷹よ、そのように伝えておくれ。---》

だんだん私は気を整え始めた。体を動かしてもみた。しばらく後私は上半身を起こそうとしてびくっとした。左側の足がちくっと痛かったからだった。やっと体を起こしてみると、軍服のズボンの股が鮮血でべっとりと濡れていた。そして裂けた頭からも血が流れ落ちた。私はとたんにおびえた。私まで病身になったらどうしようという心配が胸を苦しめた。

私はこの不幸な事実を信じたくなかった。私は地面から起き上がろうとした。何べんも起き上がろうとひどく苦労したが結局は無駄だった。私は石が散らばっている地面に再び倒れてしまった。意識が昏迷となった。私は深い深淵の中に落ち込んでゆくような感じがした。---雲がむくむくと湧き上がり、その下にうっそうとした大樹林が展開された。

樹林の中―小屋が現われた。その小屋に向かって《討伐隊》の奴らが狼の群れのように押し寄せて来る。そして今にもピ同志におおいかぶさろうとする瞬間---《あっ！》という一声に驚いて私は起き上がった。そして何も考える余地なく小屋がある方に向かって足を踏み出した。いくらかの間走を踏み出した私はそれが夢であり、自分の声に驚いて目を覚ましたのだということを知った。その時初めて私は深い安堵の息をつきながら岩に腰かけた。

たくさんの鳥がそれぞれきれいな声を自慢しながら鳴いていた。私が腰かけた岩のすき間に根をさしこんでやや曲がって伸びたくぬぎの枝からも鳥の鳴き声が餐をこぼすように下に流れた。

くぬぎの枝にはひわ（すずめ科の鳥）の巣があった。母さん鳥が食べる物を手に入れて巣に飛んで入ると ひなたちがそれぞれ口をちゃっちゃっと広げて鳴く。

母さん鳥は本当に休みなく働く。私の目の前にはちらっと小屋の中のピ同志の姿が浮かんだ。ピ同志はただ私が帰って来るのだけを目がくぼむほど待ち焦がれながら飢えた腹わたをかかえているだろう。私は強い良心の苛責を感じながらその場から立ち上がった。

私が二株の松の木の下で落ちた松かさ三つを拾って小屋に這い下りて行く時にはすでに四方は薄暗くなってきた。小屋の近くまで至った私は泉のところに行って血のついた顔を洗った。ピ同志に心配をかけないためだった。そして手ぬぐいで頭を包んだ。

小屋の近所で私はしばらく小屋の中の動静を探った。静かだった。私はそっと[redacted]腹這いで進んで小屋の入口のそばにうつ伏せた。やはり静かだった。

不吉な予感に包まれた私は入口の柱にもたれながら中に入った。

ピ同志は目を閉じたまま横たわっていた。

三つの松かさで夕食を用意した私は部屋の中に松明をともしてピ同志を起こした。彼はびっくりしながら目を開けた。私と分かると彼は体をがばっと起こしながら《ミョンファお母さん!》と叫んだ。

私は彼に松の粉に水を混ぜたものを[redacted]出しながら何事もなかったように低い声で《早くお上がりなさい。どんなにお腹がすいたでしょう。》と勧めた。

ピ同志は松の実の汁をしばらく見つめると、ぽつりぽつりと話すのだった。

《私だけしょっちゅう食べてどうします。半分ずつ分けて食べましょう。》

彼は松の実[redacted]の汁が入った食器を私に押し[redacted]ながら同じ言葉をくり返した。立場が苦しくなった私は彼にこんなことを言った。

《私は病気でないからかまわないのよ。私はおしたしでも食べればかまわないから。---》

それでもピ同志は頑として受け付けなかった。うすい松の実の汁[redacted]の器をおいて私たちは少なからぬ時間を過ごした。そうしてとうとうピ同志は涙ぐみながらその松の実の汁を飲んだ。

---我々は二カ月と17日の間(77日間)をトンファの樹林の中で過ごした。その間の話をすべて書こうとすれば余りにも長くなる。だから締めくくりに一言だけ言って話を終えようと思う。

その日も私は山の中を這いずり回りながら青々としげった草の葉をつんでいた。時はすでに4月頃だった。急に山の下から聞こえてくる異常な騒音

に私は耳を傾けた。ぶつぶつつぶやく声が山の下の方からはっきりと聞こえてきて、乾いた木を叩く音が聞こえてきた。私は気を取り戻した。私はやっと乾いた木二個を見つけて《タッ！タッ！》と叩いた。パルチザンの暗号だった。すると山の下から《ミョンファお母さん！》という激した声が聞こえてきた。そして一人の人間が急いで山の中腹をたどり登ってきた。

その人は連隊長だった。続いて連隊の戦友たちが駆けつけてきた。こうして余りにも恋しかった連隊はトンファの樹林の中に77日ぶりに帰って来たのである。

その間連隊は言葉で表現しがたい苦難の道を歩いた。ほとんど毎日のように敵を迎え討って戦わなければならず、奴らの兵舎を奇襲しなければならなかった。武器と食糧を戦取するためには水火をいとってはならず、革命の勝利のためには命も惜しみなく捧げなければならなかった。だがそのような日々にも連隊は一時もこのトンファの樹林の中を忘れたことがなかったという。

連隊長は私の手をつかんで言った。

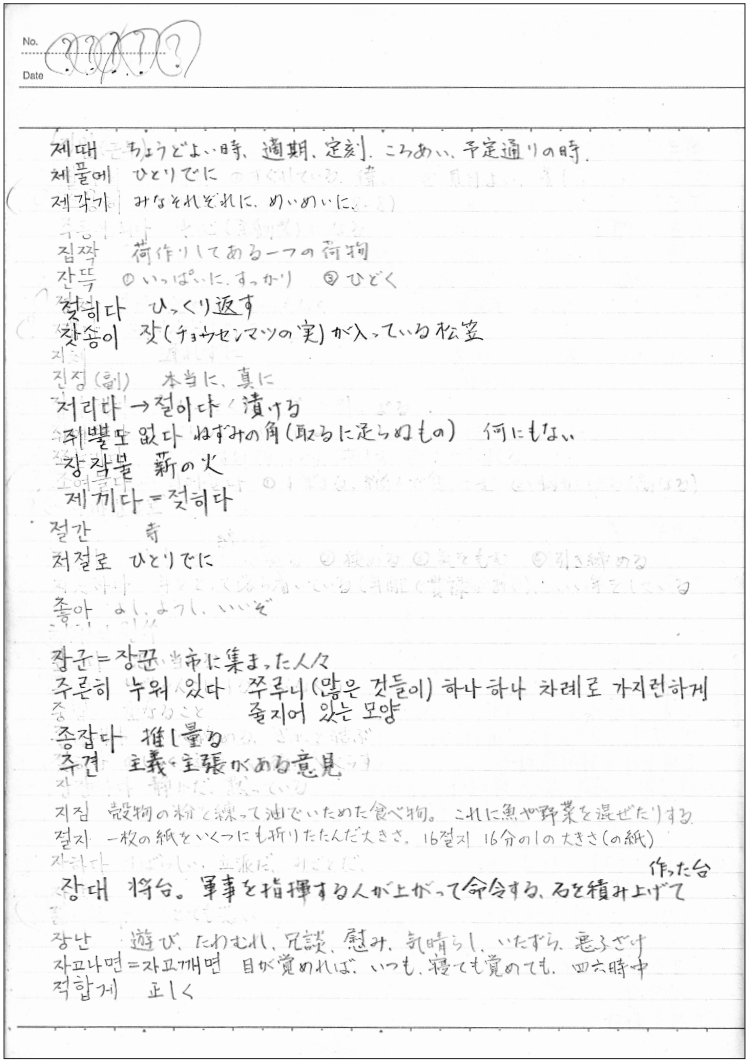
《信じていました。こうして生きているといつも信じていました！》

そしてピ同志は連隊長のよこでのどのつまった声で言った。

《連隊長同志！私はこのお母さんを永遠に忘れることはできません。》

資料2　翻訳ノート（1冊目）

翻訳文が書き記された計21冊のノートのほかに、計3冊の「翻訳ノート」がある。「翻訳ノート」は、訳語の確認や編集作業のために作成されたもので、このページでは訳語の確認作業が行われている。



No.
Date

제때　ちょうどよい時、適期、定刻、ころあい、予定通りの時
제풀에　ひとりでに
제각기　みなそれぞれに、めいめいに

짐짝　荷作りしてある一つの荷物
잔뜩　①いっぱいに、すっかり　②ひどく
젖히다　ひっくり返す
찬송이　잣(チョウセンマツの実)が入っている松笠

진정(副)　本当に、真に
저리다→절이다　漬ける
쥐뿔도 없다　ねずみの角(取るに足らぬもの)　何にもない
장작불　薪の火
제끼다=젖히다

절간　寺
저절로　ひとりでに

좋아　よし、よろし、いいぞ

장꾼=장꾼　市に集まった人々
주르히 누워 있다　쭈구니(많은 것들이) 하나 하나 차례로 가지런하게 줄지어 있는 모양
종잡다　推し量る
주견　主義・主張がある意見

지짐　穀物の粉と練って油でいためた食べ物。これに魚や野菜を混ぜたりする
절지　一枚の紙をいくつにも折りたたんだ大きさ。16절지　16分の1の大きさ(の紙)

장대　将台。軍事を指揮する人が上がって命令する、石を積み上げて作った台

장난　遊び、たわむれ、冗談、慰み、気晴らし、いたずら、悪ふざけ
자고나면=자고깨면　目が覚めれば、いつも、寝ても覚めても、四六時中
적합게　正しく

ㅈ ㅉ

No.

Date . .

조마조마 はらはら、ひやひや
주대=중대 芯、主体性
조심조심 気を付けて
종적 (なくなった、行ってしまった) 後に残された跡、足跡

정신이 아뜩하여지다 気が遠くなる、目まいがする、ふらふら、くらくら
이 흐려지다 ぼける
이 아찔하여지다 目まいがする、くらくら、ふらふら、くらっとする

점병 (粘餅) もち米、粟、稗などの粉を水に溶いて鉄板で焼いた餅
송편 うるちの粉を熱湯で練って平たく伸ばして半月形に作り、中にごま、小豆、豆、栗などで作った餡を入れ、せいろうに松葉をしいて蒸した餅。秋夕(旧暦8月15日)に作る。

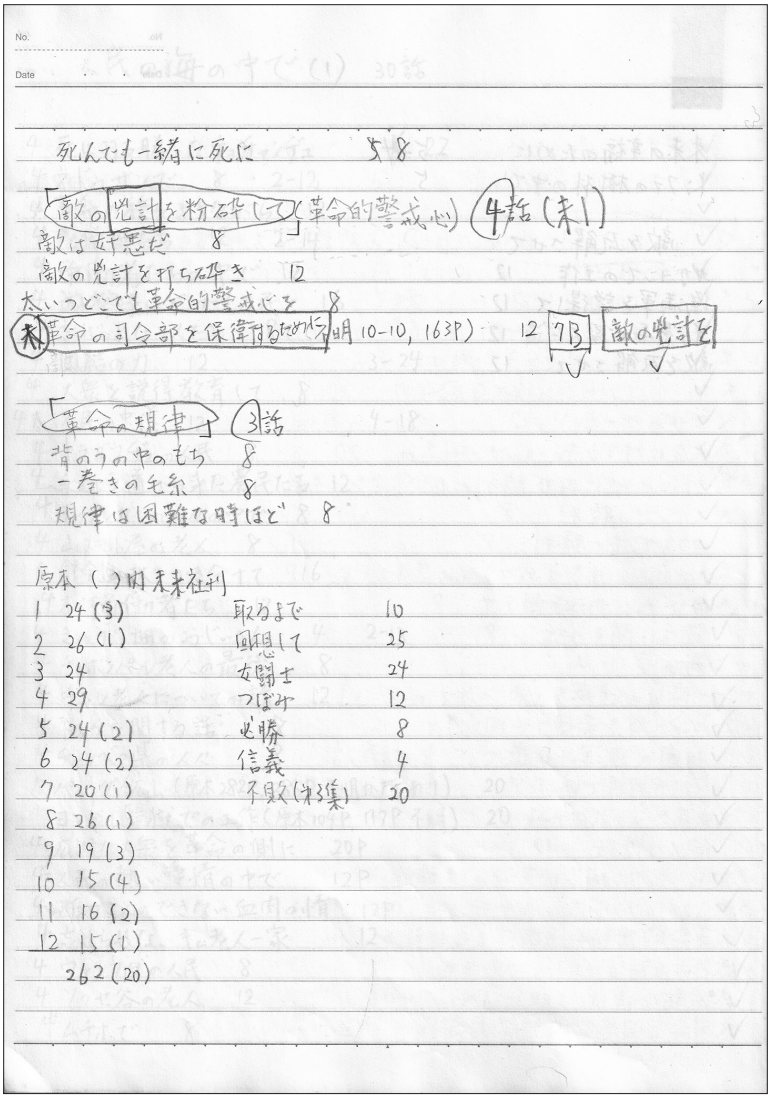
쫄라병 (축급증) 全身が硬直する、手足がひきつる 영양 부족과 추위에서 오는 병으로서 사지가 가다듬어 몸을 움직일수 없다
종된자
(에구) 장하기도 (해라)
제랍시다
집제적인 (지혜) 非常に大きな
(겨발기를) 제끼다
지양개
자력변
저레

정들다 なつかしい
(시간을) 짜내다 裂く
진땀이 솟다 あせりを感じる
조급하다 あせる
정신을 차리오 しっかりしろ
지체 없이 すぐさま
정신없이 夢中で
(적을) 잡다 打ちたおす
줄칼 やすり
제대로 充分に、らくに、思うように
죽음의 고비 死線

주저앉다 くじける
지척 一寸先
잠들다 寝つく
쪼그리고 앉다 うずくまる
자리잡다 おかれる
족치다 たたきのめす
짜고들다 協力する
조성된 もたらされた
조성 助長

資料3　翻訳ノート（3冊目）

3冊目のこのページでは、7巻本の「翻訳全集」をまとめるうえでの各話の配置が検討されている。なお、記された数字は「話」の数である。



No.

Date

死んでも一緒に死に　5 8

「敵の光計を粉砕して」（革命的警戒心）　4話（未1）

敵は奸悪だ　8

敵の光計を打ち砕き　12

太いつどでも革命的警戒心を　8

（未）革命の司令部を保障するために（明 10-10, 163P）　12　7B　敵の光計を

「革命の規律」　3話

背のうの中のもち　8

一巻きの毛糸　8

規律は困難な時ほど　8

原本（）内未収録

1	24 (3)	取るまで	10
2	26 (1)	回想して	25
3	24	女闘士	24
4	29	つぼみ	12
5	24 (2)	必勝	8
6	24 (2)	信義	4
7	20 (1)	不敗（未3集）	20
8	26 (1)		
9	19 (3)		
10	15 (4)		
11	16 (2)		
12	15 (1)		
	262 (20)		

No.
Date
銃を取るまで
革命の同志
女闘士
つぼみ
不敗の隊伍
必勝の信念
規律
兄計を粉砕
同志愛
人民 30+14
キム・イルソン 26+13
抗日統一
敵を互解
計 242
第一集 31
第二集 36
第三集 33
第四集 38
第五集 37
第六集 3+3+32=38
銃を取るまで T
革命の同志を回想して T
不屈の女闘士たち T
革命のつぼみたち T
必勝の信念 F
革命的信義 T
キム・イルソン F
不敗の隊伍 F
抗日統一戦線 —
人民の海の中で F
MEMO
取るまで 10 ✓ 22
同志 25 ✓ 27
女闘士 24 ✓ 31
つぼみ 12 ✓ 35
信義 4 ✓ 25
規律 3 ✓ 28
四計 4 ✓ 30
必勝 +8 8 ✓ 25
不敗 22+30 = 52 58 ✓ 19
キム 28+13 = 41 40 42 ✓ 242
人民 30+13 = 43 ✓ 42 ✓
互解 4 ✓
統一 8 ✓
244

資料4　「釜ヶ崎反入管通信」

「釜ヶ崎反入管通信」については、解説22〜23ページを参照。

釜ヶ崎反入管通信

創刊号　2月21日

発行　釜ヶ崎反入管闘争組織部

万国の労働者は団結せよ！

日本一の土建会社はタコ部屋、手下から大きくなった

鹿島建設は戦前・戦中タコ部屋だった。

鹿島建設といえば、日本一の土建会社、鹿島組などの母体の大手建設業者は、戦中、強制連行した朝鮮人、中国人をタコ部屋に閉じ込め、強制労働させ、虐待し、虐殺し、今のように「一流」会社になった。大きな会社ほどアクドイことをやってきたのであり、それに労働者を奉仕させたのだ。日中国交回復の日に殺された田中角栄もその四一年、新潟県（日本海側）の土建業を始め、朝鮮に渡り、四十四年に田中は満州で工場の朝鮮人の物私土建業が二千万円（今の金で百億円）という仕事をやり、その三十七万五千人の朝鮮人労働者を使ったりしていた。タコ部屋で人間らしい扱いを受けず、労働者は殺され、多くの人びとが虐殺された。みんな無念の涙を流して死んでいったのだ。

日中国交回復に涙がでるが、（朝鮮人）強制連行、虐殺、タコ部屋、というのは絶対に忘れてはならないのだ。

そこで《釜ヶ崎反入管通信》創刊号として鹿島建設（旧名は鹿島組）がどんなに残虐な犯罪企業であるかを徹底暴露する。

花岡事件（約九百人中六人のうち約半数が殺された）

一九四五年六月三十日、秋田県花岡鉱山で中国人労働者約八百名は、鹿島組の虐待虐殺に対し、ついに蜂起した。これらの労働者は、日本軍によって親、兄弟から無理やり引き離されて、つれ去られてきたのであり、当時、日本軍によって強制連行された中国人労働者は約四万人、その殺害された者は約四千人にのぼる。「中国人強制連行」に関する資料（政府）

「……一日の八〇〇グラムの粟せんべいとコーリャンだけで、ろくに休みもなく、ムチ打たれながら、坑内の重い荷物を運ばされ、食事も一日に二回、寝る部屋は、ムシロ一枚の中間はつぎつぎと死んでいきました。労働者は、二日に五、六人、二十日間で三分の一が死んでいった。……」（強制連行された中国人の証言）

つるはし、スコップ、日本刀を振回し、ポリ公、憲兵、警察官など約二千人の追手に囲まれて、五〇人近く撃殺された。一週間後に全員捕まった。その後、炎天下に三日間、一滴の水もなく、集団虐殺され、七十三名が殺された。

生き証人の証言

「花岡暴動が起こって二日目の六月三十日、私は捕まり、殴られ、ムチ打たれ、ケガをしました。」

「花岡に行きました。暴動の後、私は、山中を逃げ回っていたが、捕まって、引きずられ、花岡に帰った。」

「花岡事件の生き証人の一人の婦人の前に立つと、当時のことがありありと思い出されました。」

→裏へつづく

――まだ少年だった看護班員の趙青兒（当時14才）と、腕をしばられたまま、三日三晩、共産館まえに、さらしものにされた。飲まず食わずだったので、三日間で八〇名もの仲間が、死んでいった。共産館のなかでは、残酷な拷問がある。昇小風は両手の親指を針金で天井のハリにつるされ、水注射をされた。そして、水ぶくれになったからだを床に横たえると、さらにクツで腹部を強く踏みつける。すると、昇小風の目や耳から水があふれて出た――。

思い出しても、身の気がよだつ場面でした。寒中、裸足のままの重労働。リンゴかすのマカまんじゅう。二度とあんな思いはイヤです。私は北京郊外のいなかで、婦人科・小児科のインターンをしていたが、戦斗が激しくなり、昼は日本軍、夜は馬賊など、おちおちしていられないので、八路軍のゲリラ（衛生兵）に入っていて、日本軍に捕まった。二十七才のときです。

それから、今日までの三〇年近く、私たちは、どんな思いで生きてきたか。口ではいえないです。戦後すぐなど、金なし、寝ぜきなしで路頭に迷いました。それに、私、中国に帰れない。日本で死んだ仲間が大ぜいいる。その人たちの、子供、兄弟が私たちをどんな目で見ているか。昭和三十八年、中国の兄貴から手紙きました。〝きみは帰りたいというが、その顔して、国に帰ってくるかって。それ以来、中国に帰る気持なくなりました。……」

――林癸森さんの話（潮十月号より）

「誰もがあすには、もう一人の〝李担子〟になそうな毎日だった。二〇才になったばかりの李担子は、身体が弱く精薄児に近かったので栄養失調と虐待のために連日むくると化していく同胞の死体焼き場の番人をさせられていた。彼は毎日、中山寮のまくら元に木箱を大事に置いて、深夜みなが寝静まってから、こっそり木の箱を開けていた。ある夜、不審に思った私が、木箱に首を突っ込んでいる李担子を押しのけると、何と、くだけた箱の中から、人間の焼けた肉が砕け散ったのである。李担子は昼間、キセル入れた同胞の死体の肉をむさぼり食っていたのだ。

だが、花岡中山寮の生き残りの一人は、〝人間の肉を食ったのは、李担子だけではなかった〟と証言している。あのとき、人間の肉だから食べることができないとか、食べられるとかは問題じゃなかった。あすにも、もう一人の〝李担子〟になりかねない飢えと疲弊に苦しんでいたのである。

――俊傑の中には、死んだ人、生き残った人の選ばれあうが、みなおなじように地獄の苦しみを味わったものばかりだ。虐殺組は、政府は、この問題について、これまで何ひとつ説明しようとはしなかった。政府は企業に賠償金を払ったというが、仇ならいた人間には戦後一銭も与えていない……」

――李振平さんの話

圧のあるところ反抗がある！

資料5　レジュメ「「全泰壱（チョン・テイル）」デーを成功させるために」

1982年9月9日記。鈴木が「チョン・テイル」デーの実現のために作成したレジュメ。「チョン・テイル」デーについては、解説17〜18ページを参照。

No. 82.9.9

全泰壱（チョン テ イル）デーを成功させるために（その一）

文責 S

・全泰壱の戦いの軌跡と南朝鮮労働運動

全泰壱は幼少の頃より新聞売りや靴磨きなどの苦しい生活をした後裁断師の仕事についた。しかしそこで彼が見たものは劣悪な労働環境（屋根裏部屋で換気もなく照明も悪い）と長時間労働（12〜13時間）と超低賃金で肉体をむしばまれて弱く若い労働者たち（とりわけ女工）の姿だった。彼女たちはシタ（下の意）と呼ばれたが、彼は自分が裁断師になって（シタの上に位置する）彼女たちの苦痛を少しでも取り除いてやろうとした。しかし彼はじきに、個人の善意では問題は解決されないと悟った。そこで彼は「勤労基準法」を勉強した。しかし研究すれば研究するほどこの法律が何の役にも立たないことを痛感させられた。そこで彼は、勤労者の権利は彼ら自身が団結して斗って保障されるようにしなければならない、という結論を得た。彼は「門衆の会」、さらに「三株親睦会」を組織して戦いを続けたが、彼らが受けたのは解雇と警察の弾圧だった。彼は悲壮な決心をした。この戦いにはどうしても犠牲が必要だ。自らの死をもって労働者たちに訴えよう。「起ち上がって戦おう」と。1970年11月13日全泰壱（当年23才）は、勤労基準法の本を抱き、全身にガソリンをかけて火をつけた。実施されない勤労基準法の"火刑式"を実行したのである。彼は「私の死を無駄にするな」と叫んで絶命した。

全泰壱の決死の戦いはたちまち南朝鮮の社会を揺り動かし始めた。労働者たちは起ち上がり始め、ついに労組を結成した。学生たちは自己批判し、続々と労働者街や農村に入っていった。キリスト者たちも労働問題に取り組むようになった。そしてこれが1979〜80年の釜山、馬山等の大斗争、そして耐えがたき苦痛と怒りに身を震わせざるを得ない光州蜂起へと繋がったのである。

・日朝労働者は運命共同体

南朝鮮の労働者の状態こそは労働者の普遍的な存在であり、日本の労働者のように独占資本の帝国主義（侵略）的収奪（他国勤労民衆からの）の「恩恵

1.

で闘うのは特殊な存在である。日本の労働者は南朝鮮の労働者と運命を共にしなければならない。とりわけ日本の下層労働者は労働者の苦痛を共有できる存在である。南朝鮮労働者の苦痛を自らの苦痛と受けとめ、彼らの闘いを心から支持、支援しなければならない。そうして自らの解放運動の任務を立派に果すことができる。↑

全泰壹の母李小仙(イソン)さんの手紙から引用する。「私の息子の骨が私にしっかり、教えたことは、抑圧する者たちは一つであり、抑圧される者もまた一つであるという真理です。」「労働者の権利のために、民主主義と人権の勝利のため世界の抑圧された民族や民衆のためにも、強大国が勝手に分け、分断された悲劇の地が自主的に平和的に再び統一されることが決定的に重要な課題です。…日本の支配者たちがこの問題について今までにどんなことをしてきたかは皆様が御承知のことと思います。皆様が職員の、勤労者たちの痛みに関心をお持ちになるなら、何よりもまずこの問題に対して皆様が当然なすべきことをなさねばならないと信じております。」

「この問題」とは言うまでもなく日本の支配者たちがアメリカ帝国主義と共に朝鮮の南北分断を積極的に推し進めていることである。そして「当然なすべきこと」をやっていないのが日本の労働者階級であり、左翼である(反帝国際主義と念仏を乃適違える左翼はいくらでもいるが。)

◦全協と全泰壹デー(意義と獲得目標)

[redacted]

1. 全協の「反帝国際主義」の中味を明らかにすること

「念仏」ではなく、実際に国際主義に貢献すること。そのためにはどうするか。を打ち出して行く契機とすること。これまでは我々はとかく寄せ場の内ばかり目が向きがちだが、もっと寄せ場の外に目を向け、内と外を結びつけることに習熟しなければならない。釜共斗の敗北の原因の最大ここにある。日雇全協(寄せ場全協ではない)の結成の意義を再確認してほしい。とにかく全協を強化させなければならない。全泰壹デー。

2.

開催する最大の意義・獲得目標はそこにある。

2. より大きな団結を求めて

前項のことと関係するが、寄せ場の内にしか目が向かないので我々運動が十年を経過しているのにも関わらず小さな団結（それも極めて軟弱な）しか作れていない。言うまでもなく搾取と抑圧、差別と貧困に苦しみ、怒りを燃やすのは日雇労働者だけではない。またそのような人に心から同情し、共闘しようとする良心的なプチブル階級の人々（いわゆる「知識人」、「文化人」等）も少なくない。全泰壹はまさにこれらの人々全ての魂を突き動かしたのである。我々は全泰壹の精神にかけて、この集会を成功させなければならない。

以上のことを獲得目標として整理する。

1. 現在全協に結集している部分が、南朝鮮労働者の苦痛、怒り、闘争意志を自らのものとして日本帝国主義と戦っていけるようにする。そのための学習材料と、この問題に対する永続的な機関を確立する。

2. 現在全協に結集していない仲間たちを結集させ、全協の力量を拡大する契機とする。① 我々の周囲にありながら我々の内に入ってこない人たち（例えば釜ヶ崎での釜共闘の人たち）② 我々の周囲にあって比較的我々の影響を受けてない労働者たち ③ 在日朝鮮人日雇労働者で我々が接触できない人たち ④ 四寄せ場以外で闘争の意志を持つ、あるいは関心を持つ日雇労働者

3. より広範な人たちと、とりわけ労働者階級の人たちと越冬や争議での支援・応援という関係を乗り越え、より大きな目標へ共同闘争できるような関係を作っていく契機とする。① 地域労働運動として結合できる人たち（例、西成金男会）② 民族的組織との結合（センター、ガデュマル等）③ 課題別組織との結合（11・22救援会、南民戦、反原発等）

・方針

準備　資料作成　担当面 N. M を中心に。

全協内学習活動

3.

とりあえずの学習資料として李小仙さんの「手紙」と「手記」があるが、これは全員が読んでほしい（すぐコピーする投取をする。現在庫は釜に教部、笹島に一部、ただし自料。ホー・チ・ミンが言っていた 全を出した方がよく読むと）。その上で討論してほしい。なぜ我々が南朝鮮の労働問題をとりあげるのか、或いは必要でないのか。全泰壹の訴えをどのように受けとめるべきか、それに対して我々は何を任務とすべきか等。

○呼びかけ

口答で呼びかけれる人たちにまず口答で呼びかけてほしい。

（寄せ場内、寄せ場周辺、及び友好団体）

呼びかけ文、及びステッカー。

両方とも今月中には作成したい。ステッカーは立派なものを作りたい（5.28のステッカーは仲々の評判だったが、それ以上のものを）。

11.13

本年度の11月13日は土曜日である。そこで14日（日曜）を本集会としたい。まず前段集会を各寄せ場単位でやりたい（日時は各単位の都合に合わせればよい）。主眼は日雇労働者に我々が取りくもうとする問題について基本的な認識をしっかりとうえつけることである。とりわけ排外主義の克服に重点を注がなければならない。

本集会は東京と大阪でやりたい。理由は簡単。より大きな力量を結集したいからである。我々の力量が乏しいのに二か所に分かれてやるのはシンドイという意見も出ようが、我々全部の力量だけで考えるからで、我々の周辺にこの問題で力になってくれる人はいくらでもいるし、何よりも獲得目標で設定したことを実現するには最低東京・大阪（力量があるならもっと各地に分かれてやりたいぐらいだ）が必要だ。

前段集会にしても本集会にしてもおもしろい、味のある集会をやりたい。日本の左翼の集会は一般に能書き大会に終始し、しゃべる方は得意かもしれんが、聞く方はとても耐えられん。胸をうつような集会をやりたい（歌やできれば演劇などを盛り込めると良いのだが、わずか二か月の準備期間で

無理か?) 1. 追悼詩・追悼歌(できたら朝鮮のものがよいが、分からなければ「同志はおれぬ」)、2. 集会基調、3. 講演(桑原、梶村等)、歌等、4. 宣言(是非とも必要だ)

継続

筆者は決して11.13ですばらしいものが獲得されると思っているわけではない。(今までの蓄積がみくびれないし、たった二カ月で何が準備できるか)、獲得目標の項で述べたようにこれを契機にしたいということなのである。そのためには、

1. 全協内に朝鮮問題に取り組む恒常的機関を11.13までに確立し、11.13に確認すること。できれば「全泰壹通信」(仮称)を作りたい。全協機関紙ができるならばそこへの連載としたい。
2. 全協内の学習を継続できるようにしたい。
3. 友好団体との協議を継続できるようにしたい。
4. 次の目標を設定したい。

注 補:この中味の薄い文章の責任はぼくにある。しかし中味の薄さそのものはぼく個人の責任を越える。より多くの仲間たちの努力の結集によってより中味の濃い全泰壹デーを作りたい。全泰壹デーは実質的に全協の門出と言ってよい。是非とも成功させよ!

5